

来 賓 挨 拶

高知女子大学学長 池 川 順 子

第17回の高知女子大学看護学会おめでとうございます。連日30度をこす真夏日が続いておりますけれども、こうしてこの学会にご参加いただきました皆様、ここには、この学会を作り育ててこられた方たちの思いがつまっていると思います。去年、私、学長になりまして、最初のご挨拶をここで、申し上げましたが、今日はまた、随分去年よりたくさんお越しになっていて、このようにメンバーがだんだん増えているのは、今日の講演に対する大変大きな関心とも思いますが、だんだん会場が狭くなるのではないかと思います。

先程、山崎会長からお話がありましたが、「看護の日」というのがはじめて今年設けられまして、いろいろな側面から看護のことに対する認識が一般的に深まってきました。それは、看護職員の過重労働、それから人手不足、さらに看護職員の養成問題というような誠に大きな多くの側面もありますが、一般に看護職というものの重要性、そして「学」であれば「看護学」というのは何であるかということをもますます確立していかなければいけないということになります。私はこの立場になりまして、いろいろ書いたり、話したりすることを恥ずかしげもなく、という場面が多くなっているわけですが、昨年の11月号の「看護」という雑誌、これは看護協会から出されておりますけれども、書け、ということで、何を書こうかと七転八倒いたしました。苦しんだあげく「患者の立場」というもっともらしいタイトルをつけまして、自分が入院した体験で、ベッドに寝ながらの看護婦さんとの対応の中で自分なりにいろいろしたこと、体験して感じたことを患者の立場で書きました。私は、これでやっと看護の裾野の方の端っこに一つ参加した、というひそかな喜びを感じた文章です。

高知女子大学看護学会は17回目、第1回は昭和51年1月25日に開かれております。私は、その集録を1回から目を通してみました。1回、2回の積み重ねの中で看護のいろいろな側面から皆様が一生懸命取り組まれている姿というのが現れておりまして感動しました。その第1回に、当時の安中学長が「発刊を祝して」ということで書かれていますが、「この機関誌が学会、看護学会において重くみられるか否かは、いつにかかって関係各位の努力にある。各位の精進を期待してやまない」というお言葉がありますけれども、皆様の積み重ねそのものがこれにおこたえすることになっている、そういう思いで拝見をしました。

今日のご盛会を願っておりますが、本当にわざわざ今日のために遠くまでお越しいただきました岡堂先生と島内先生にお礼を申し上げまして私の挨拶といたします。ありがとうございました。